

# 日本の少女向けテレビアニメにおける外国イメージ の変容

## The foreign image drawn by the television anime for girls in Japan

研究代表者：

谷本奈穂 関西大学総合情報学部教授

共同研究者：

東園子 大阪大学人間科学研究科招聘研究者

猪俣紀子 京都国際マンガミュージアム研究員

増田のぞみ 甲南女子大学文学部専任講師

山中千恵 仁愛大学人間学部准教授

Naho TANIMOTO (Kansai University, Faculty of Informatics, Professor).

Sonoko Azuma (Graduate School of Human Sciences, Osaka University, Visiting  
Researcher).

Noriko Inomata (Kyoto International Manga Museum, Researcher).

Nozomi Masuda (Faculty of Letters, Konan Women's University, Lecturer) .

Chie Yamanaka (Faculty of Human Studies, Jin-ai University. Associate  
Professor).

### 概要

若者が海外へ移動する動機には外国への憧れが関わっていると考えられる。その憧れを形成する要因の一つとして、外国を描いたメディア上の物語の愛好があげられる（例えば、近年、韓流ドラマの影響で韓国旅行に行く女性が話題になったように、大好きな物語の舞台になった憧れの国に行ってみたいという思いは海外への移動の強い動機づけとなりえ、その傾向は女性の間で特に強いと考えられる）。そこで、本研究は女性向けの物語メディアの中でも、女性が幼

少期に接することの多い外国を少女向けのテレビアニメを取り上げる。日本の少女向けテレビアニメで描かれる外国イメージにはどのような特徴があるのか、またテレビアニメの放映が開始された1960年代から現代に至るまで、その外国イメージはどのように変化してきたのかを、外国を舞台にした少女向けテレビアニメの内容分析と、それに対して外国人が抱く印象についてのインタビュー調査を通して明らかにするものである。

We think that many young Japanese women go to overseas because they yearn to the stories which are written about foreign countries through some media.

Our research focuses on the television anime for girls in Japan. We try to find the foreign image drawn by the television anime, in the term of “content analysis”. And we investigate the way of foreigners’ interpretation of the television anime for girls in Japan by the interview And questionnaire for foreigners.

## 1 研究目的

研究目的は、第一に、日本の少女向けテレビアニメについて、日本や外国のイメージがどのように表れているのかを考察していくことである。第二に、日本の少女向けテレビアニメが、外国の人にどう受容されているかを調査することである。

## 2 研究経過

研究代表者と共同研究者は各自で分析を行いつつ、次の日程で研究会を行って議論と分析の修正作業を行った。2012年4月16日、4月23日、10月13日、10月22日、11月19日、2013年1月4日、3月11日～12日。さらに、必

要に応じて、随時、メールとウェブ会議で打ち合わせも行った。

日本マス・コミュニケーション学会2012年春季大会(2012年6月3日、宮崎公立大学)において、ワークショップ「少女向けテレビアニメにおける「外国」と「日本」のイメージ」を開催している(谷本奈穂、東園子)。

2012年8月29日～9月4日にフランスのリヨン・パリにて、Julien Bouvard氏(リヨン第3大准教授)らに対しインタビューを行った(谷本奈穂、東園子、猪俣紀子)。フランスは比較的早くから日本アニメの受容が進んだ地域であり、現在ではヨーロッパ地域における日本アニメ・マンガの

浸透率が最も高い地域である。なお、その時に現地で行うアンケートの依頼を同時に行っている。

帰国後に、フランス人に対するアンケート調査も行い分析した。その成果は、論文「フランスにおける日本アニメの受容——二層化するリテラシー」に著している。

### 3 研究成果

まず、日本の少女向けテレビアニメについて、日本や外国のイメージがどのように表れているのかについて以下のような研究の結果が出た。

少女マンガを初めとして、日本の少女文化には「西洋」への憧れが強く表れていることがしばしば指摘される。テレビアニメではどうであったか。日本のアニメは 1960 年代から本格的に開始されるが、1970 年代から少女向けアニメでは西洋人をイメージさせる青い瞳や金髪の主人公が現れる。これらの表象は主として欧米（ないし架空の世界）出身のキャラクターに用いられていた。だが、時代を経るにつれ、日本人のキャラクターにも白人的な身体表象が用いられる例が増加し、西洋人でなくても青い眼や金髪が描かれるようになる。これは日本のアニメの特徴の一つといえる。なお、1980 年代からは、水色など染髪しない限り現実にはありえない髪の色をした主

人公も登場する。

以上のように、少女向けアニメにおいて西洋人を思わせるキャラクターはしばしば描かれるが、それは 70 年代頃に登場する。しかし徐々に、日本人に対してそのような（金髪碧眼など）身体表象が描かれるようになってきたことが分かった。

次に、そのようなキャラクター表象を行う日本アニメが、海外でどう受容されているかを検討した。今回はフランスにおいて、インタビューとアンケートを実施した。アンケートでは、キャラクターの図像の読み取りに焦点を当て、日本・欧米・架空の国出身で、髪の色が黄（＝金）・黒・アニメに特徴的な色（青）の三パターンを組み合わせ、さらに肌の色にも配慮しつつ、10 種類のキャラクターを少女向けアニメから選択し、フランスの人々に提示して出身地を予測させた。またその判断の理由について記述してもらった。最終的に、103 名に回答してもらえた。

アンケートを分析した結果、キャラクターの外見に基づいて判断する場合と（例えば、金髪碧眼だから北欧出身だなどの判断）、マンガ・アニメに関する知識に基づいて判断する場合（例えば、青色の髪のキャラクターは日本アニメのキャラクターに違いがないなどの判断）があると分かった。日

本では「自然主義的リアリズム」と「まんが・アニメ的リアリズム」（大塚英志 2003、2006、および東浩紀 2007 を参照）の二つがあると指摘されており、その二つが作品の消費形態を規定するとされる。フランスでも二つの読み取り（リテラシー）が行われていることが確認できた。「まんが・アニメ的リアリズム」があるということは、相当の程度まで、日本アニメがフランス人の間で深く浸透していることを示唆している。

本研究で、少女向けテレビアニメでは、1970年代は、西洋人に対して金髪や碧眼が描かれており、ある種の憧れを表現していたように思われる。しかし、徐々に、日本人もその身体表象で描かれるようになったことが明らかになった。80年代以降、ある種の西洋に対する憧れが薄れた可能性がある。その一方で、フランスでは、逆に、日本アニメに対する知識が浸透していることが分かった。

#### 4 今後の課題と発展

外国を舞台にした少女向けテレビアニメが、海外（今回はフランス）において、どう受け取られるかはある程度まで明らかになったが、日本においてはどう受け取られるのかは、助成期間内に明らかに出来なかった。フランス出身のアンケートを日本人に対

しても実施するのが今後の課題となる。

また、少女向けアニメに限定して調査してきたが、少年向けアニメや性別に限定しないアニメ、あるいは大人向けアニメなども射程に入れて、今後研究を発展させる必要があるだろう。

#### 5 発表論文リスト

##### ・学会ワークショップ

日本マス・コミュニケーション学会  
春季大会ワークショップ、「少女向けテレビアニメにおける「外国」と「日本」のイメージ」（谷本奈穂、東園子、福間良明）2012年6月3日、  
於宮崎公立大学

##### ・論文

谷本奈穂，東園子，猪俣紀子，増田のぞみ，山中千恵

「フランスにおける日本アニメの受容——二層化するリテラシー」『情報研究』第39号、2013年7月刊行予定

#### 6 参考文献

東浩紀，2007，『ゲーム的リアリズムの誕生——動物化するポストモダン2』，講談社

大塚英志，2003，『物語の体操——みるみる小説が書ける6つのレッスン』，朝日新聞出版

大塚英志，2006，『キャラクター小説の作り方』，角川書店